

Title	慶應義塾大学法学部略史
Sub Title	
Author	向井, 健(Mukai, Ken)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1958
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.31, No.11 (1958. 11) ,p.126- 129
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾創立百年記念特集記事
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19581115-0126

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大學法學部略史

福澤諭吉が、江戸鐵砲洲の奥平家中屋敷内に（現・中央區築地明石町）蘭學塾を開設したのは、安政五年十月下旬のことであつた。

幕末の開國にともなう時代の要請が、徐々にではあつたが時の支配層にも浸透して洋學に對する興味を喚起し、ここに福澤塾の誕生——それは同時に慶應義塾の誕生——となつたのである。いわば、一粒の麥は地に落ちたのである。

それより、年をけみすること正に百星霜、ここにわが慶應義塾は創立百年を迎える。

義塾學問の百年史は、明治二十三年の大學部設置を境に、前史と本史とに二分することができよう。前史は、安政五年の開塾以降、三十餘年の歴史を有し、主として福澤の學問がすなわちそのまま義塾の學問であつた時期であり、本史は、明治・大正・昭和三代にわたるおよそ七十年間、専門學の創設とその後の分化・發展の時代である。學問の進歩という點よりみれば、前史も、本史も、それぞれの中に、歴史的意義もちがひ役割も異なる小さな時期をいくつか包含している。以下、とくに義塾法學部の過去を回顧し、その歩んできた足跡をきわめて簡略に辿ることになしたい。敘述の都合上、まず法律學科、ついで政治學科の順序にしたがう。

明治二十三年、大學部が新設されるまでの義塾では、正規の課程において法律學の講義が行われた形跡を見出しえない。當時の課程は、もちろん英學一般であつて、特別の専門課程に細分されていのではないが、歴史學・經濟學に關する外國書がかなり用いられているのに反し、法律學に關係するそれは、まったく利用されていない。特別の専門的知識を必要とする法律學の分野では、それを讀みこなさうる適當な教師が塾内にいなかつたためであらう。

しかし、きわめて偶然な機會から、變則的な態様で法律學の講義が行われたことは、法律科創設以前において前後二回ある。最初の回は、明治六年、兒玉淳一郎による英米法の臨時講義であり、つぎは明治十二年の夜間法律科の設置であつた。とくに後者は、義塾正規の課程とは別個に設けられたものであつたとはいへ、義塾において組織的に法律學を教授した嚆矢である。そのスタッフは、目賀田種太郎・相馬永胤・金子堅太郎・津田純一であつたが、惜しくも短時日のうちに廢止された。かくして、明治前半までは、義塾の法學教育は顯著な成果をあげることができなかつた。

明治二十年、小泉信吉が招かれて塾長に就任するや、義塾の學事は飛躍的に改良・擴張されることとなつた。二十三年、義塾は私學として初の大學部を新設し、理財科・文學科の二科とともに法律科が呱呱の聲をあげたのである。いくたびか挫折した義塾の法學教育がここにはじめて實を結び、本格的な組織をととのえ、塾内正規の教育機構の一環として發足したのである。同年一月、大學部の最初の始業式を舉行したが、法律科に入學を許可された學生は八名、初代主任教授は、その前年、義塾の招聘をうけて來朝したウイグモア

であつた。この白面の青年法學者こそ、後に歸國後、證據法・法制史その他、法律學の諸分野にわたつて輝かしい業績を發表し、アメリカにおける世界的法學者の一人としてあまねく知られた、J・H・ウィグモア (John H. Wigmore) 博士その人である。彼が義塾に職を奉じたのは、二十三年から三年間であつたが、わが義塾法科の生みの親として、彼のごとき巨器をもちえたことはまことに俾せてあつた、といわねばならない。

明治二十五年の末、法律科は第一回の卒業生を世に送つたが、その一人に、卒業後義塾に残り、四十数年の長きにわたり教授としてあるいは科長・部長として學生の指導に當られた神戸寅次郎博士がある。法律科の生みの親をウィグモア博士とすれば、神戸博士こそ育ての親と呼ぶべきであろう。三十一年七月から施行された明治民法がドイツ民法をその母法としていることは周知のとおりであるが、それがため、ドイツ解釋法學の影響はわが民法學界を席捲し、大正末期までいわゆる註釋法學の黄金時代を現出した。この期の代表的學者の一人として、神戸博士の名は不朽である。

ところで、明治初期創立の法學校は、大別して英法系か佛法系かに色分けすることができる。義塾は、英學教授の傳統に沿つて英法を中心としてきたが、この特色もウィグモアの歸來後は、しだいにうすれる傾向があつた。明治二十六年、法律科は學則の改正を實施して若干の學科目につき變更を行つたが、それと同時に、別科として日本法律科を設け、日本の諸法典のみを學修する課程をひらいた。この日本法律科は、三十二年末に義塾が大學科 (三十一年四月大學部を大學科と改稱、翌年末舊稱に復す) の學制を根本的に改め

分科制度を廢止したときまで存続した。

さて、わが國は、日清戰爭後において急速に資本主義化していつた反面、勝利によつて自信をたかめた結果として、日本資本主義の色彩もいちじるしくたかまつてきた。こうした社會の狀態を反映して、十九世紀末年の義塾においても、一つの動きが感ぜられる。大學部は設置されたものの、依然として福澤塾の古い學風がつよく残り、それは一方において長所もあつたが、他方、近代的大學に發達することを妨げていた。それが、明治二十九年より三十一年にかけて、義塾全體の學事に關する大改革となつたのである。要するに、私塾的なものから脱皮して、近代的なものへ進展しようとする努力であつた、といつてよからう。

ついで、翌三十二年七月、歐米各國の學制視察の旅から歸朝した義塾の教頭門野幾之進は、大學科の學制の全面的變革を企圖し同年十二月より新學制を斷行したのである。その結果、それまで理財・文學・法律・政治學 (政治學科は前年四月に新設) の四科に分れていた大學科は、統合されて單に大學部と稱することになつたが、これは實質的には理財科中心の大學に編成替えになつた、とみていい。しかし、この門野プランは間もなく崩れ、三十六年五月にいたる舊制度の全面復活といえる新學則が定められたが、これは、同年に公布された専門學校令に準據したものであつた。法律科に配置された學科目をみるに、日本法典中心になつていくことが注目される。

この學則は、その後、ほとんど修正をうけることなく、大正九年、義塾大學部の大學令によつて改組されるまで繼續した。

大正七年十二月、勅令をもつて發布せられた大學令は、わが國大

學教育史上、劃期的な意義を有している。義塾は、九年四月より、文・經・法・醫の四學部より成る、大學令による綜合大學として發足した。法學部は、従前の法律科・政治學科を合せ、前者を法律學科、後者を政治學科と稱するようになった。これがため、舊制度の大學部は、十一年三月の卒業生をもつて終つた。

その後、昭和三年・七年・十三年・十五年・十六年に、學則は多少改定されたが、その大綱は變更をみることなく、二十五年九月、大學令による大學最後の卒業生を世に送るまでつづいた。もつともその間、さきの大戦に際會し、文科系學校講義短縮の應急措置に對應して十七年九月以來、數回にわたつて臨時學則が編成されたのは特例である。大學令による大學としての義塾法律學科は、三八〇〇名の卒業生を社會に送つてその門を閉じた。

ところで、神戸博士が道を開拓された後を、青木徹二博士・西本辰之助博士の兩商法學者が、さらに、公法の淺井清・英米法の峯岸治三兩博士らがつづかれた。いずれもすぐれた學績をあげ、法律學科の充實・發展に多大の寄與をされた恩人である。

周知のごとく、終戦後、わが教育機構は一大改變をみるにいたつた。いわゆる六・三・三・四の體系が樹立され、大學は四年制の新制大學に切りかえられたのである。義塾も、昭和二十四年四月より、文・經・法・醫・工の五學部より成る新制大學として再發足することとなり、法學部法律學科もまた、新たな學則により再出發したわけである。新制大學の上につづくべきコースとして、大學院の課程も、二十六年四月(修士課程)および二十八年四月(博士課程)に開設され、法學學科關係としてはいずれも民事法學專攻科が置か

れて、現在におよんでいる。

義塾大學科の一部門として、政治學科が創設されたのは、明治三十一年四月の學制改革のときであつたが、これが今日の法學部政治學科の前身をなすものである。その前月に創刊された「慶應義塾學報」第一號所載の「慶應義塾學事改良の要領」を披見するに、「……其他尙ほ改良の點を云へば……大學部に於ては法、文學、理財學の外に更に政治學科を置て有爲の政治家を養成する管なり」とみえてゐる。これによつてうかがえるように、政治學科設置の目的は、有爲の政治家養成にあつたわけである。この新しい學科を設けるについては、波多野承五郎の盡力があつた、と傳えられる。

かくて初年度においては、第一學年に七名、第二學年に一名、第三學年に四名の學生が入學した。當時の政治學科の講義を擔當したのは、主として外來講師であつたが、有賀長雄・吳文聰・土方寧、あるいは若き日の平沼騏一郎らの名が見出せる。すでに述べたように、このころは一私塾よりの脆皮を期していた時代であり、先輩が後輩を輪讀などによつて教導した創生期から、學制が分化して各科独自の課目を配した時期への移行はあつたものの、義塾出身の専門課程の教授を生むにいたらなかつた過渡期の狀況がみられる。

翌三十二年は門野プラン實施の年である。誕生後、いまだ日も淺い政治學科も他の三科と同様に大學部に統合され、ひとまず分科制は廢されることとなつた。この門野プランは、歐米諸大學の學制に則りもつとも進歩的な構想にもとづくものといわれ、わが國の大學におけるこの種の制度の先驅的な試みであつたが、當時にあつては

なおこのような制度を行うのには不便もすくなくかつたとみえ、間もなく門野プランは崩れ、科別を有しない卒業生はすつたく生れないままふたたび分科制に戻り、舊制度の復活をみるにいたつた。

由來、わが國の政治學は進歩がおくれている。しかし、これはわが國だけの傾向でなく、世界の一般的傾向かもしれない。ところで明治初年においては、政治學關係の書物は數多く翻譯されたり紹介されたりしているが、學問として體系化された政治學が公けにされたのは、かなり年代が下らねばならぬ。小野塚喜平次博士の「政治學大綱」(上・下)が梓行されたのが明治三十六年のことであるから、義塾政治學科創立當時に、政治學が正規の課目として存在しなかつたのは無理もないかもしれない。政治學科の政治學講座は、國家學の名をもつてする藏原惟郭の講義がその濫觴のようであるが、四十一年にいたると、政治學・政治學史・列國政治史の講義を、田中萃一郎博士が擔當せられている。田中博士といへば、「東邦近世史」などの名著により歴史學者として令名がたかいが、元來は政治學科の教授として教壇に立たれていたのであつた。田中博士の死去に際し、小泉信三博士は、「田中萃一郎博士の死によつて慶應義塾は償うべからざる損失を蒙つた。これは單に故博士の比類稀なる學殖のためのみいうのではない。剛毅、誠實、親切、義俠にして磊落洒脫なる尊敬すべき親愛すべき人格の一朝にして我社中より奪われたことを悲しむのである」と追悼の意を述べられたが、これによつても博士の人格が察知できよう。

政治學科で外交史・比較憲法などを長く講義され、またあるときは國會議員として議政壇上に立たれ、さらには慶應義塾長として日

吉の建設に功勞のあつた先達に、林毅陸博士がある。昭和八年、塾長を辭して後も、依然として西洋外交史を擔當され、十一年には帝國學士院會員に選ばれた。終戦後に刊行をみた「歐洲最近外交史」は、世界的水準をいく好著といわれている。

門野プランが潰えて、専門學校令に據つて新學則が定められた明治三十六年に政治學科を卒業し、ただちに義塾に職を奉じられたのが、板倉卓造博士である。政治學・國際法を專攻せられた博士は、現在なお「産經時事」に警世の健筆をふるわれているが、それはあたかも、福澤諭吉が義塾の教壇と「時事新報」の論壇とを二つながら全うせられたのと相通する。

このほか、大著「英國憲政史」をものせられた占部百太郎博士・憲法學の山崎又次郎博士・西洋政治制度史の積智雄氏、さらには高城仙次郎博士・成瀬義春氏ら、いづれも政治學科の發展に盡力された先蹤である。

大正九年四月より、大學令にもとづく綜合大學として義塾が發足してからは、政治學科は法律學科とならんで法學部を構成することとなり、それ以降の變遷は法律學科のそれと軌を一にする。終戦後の昭和二十四年、新制大學として法學部政治學科も再出發し、現在にいたつている。政治學科關係の大學院としては、修士課程・博士課程ともに政治學專攻科が設けられている。

法學部の機關誌として、法律學科・政治學科共通に大正十一年創刊されたのが本誌「法學研究」である。戦後復刊以來、他大學にも類例すくなき月刊學術誌として、毎月、法學部關係者の論稿を掲載し、充實した内容をもつて學界に多大の貢獻をしている。(向井 健)